

新年あけましておめでとうございます。昨年の暮れから市内は大雪に見舞われ、例年以上に寒さを感じる年明けとなりました。今年も埋蔵文化財センターは、最新の発掘成果のニュースや、さまざまなイベントを用意して皆様にお届けしたいと思っております。

さて今号では、昨年の10月から12月にかけて実施した4件の発掘調査の成果に加えて、去る11月23日にオープンした下之郷史跡公園でのイベント、“環濠あめづくり”の様子を紹介したいと思います。



● 発掘調査の成果 ●

(1) 塚之越遺跡の調査(平成22年10月1~7日)

古高町字正楽地先にて、宅地造成に伴い、約70㎡を対象に発掘調査を実施しました。検出した溝SD-1はコの字状に巡り、底からは弥生時代後期の土器が出土しました。溝はその形状から、当時の墓である“^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓”である可能性があります。また包含層からは、平安から鎌倉時代の^{こくしよくどき}黒色土器などの遺物も出土しており、近辺にはその時期の集落があった可能性がうかがわれます。



塚之越遺跡 全景 東から

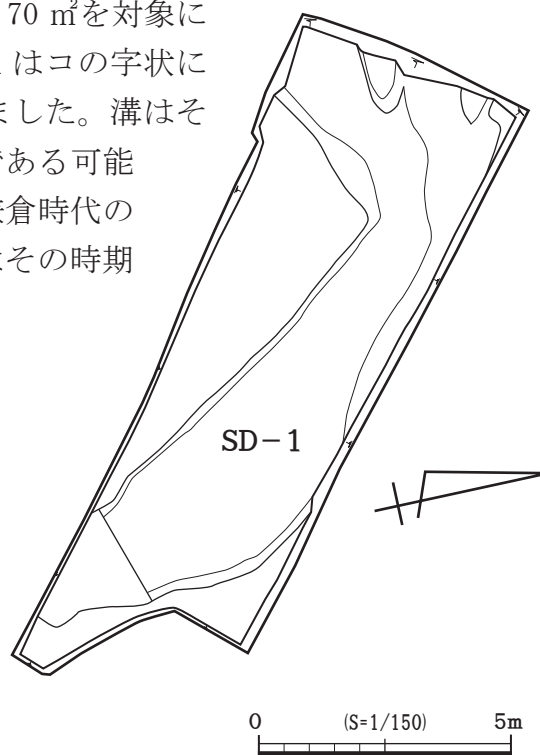


図1 塚之越遺跡 全体平面図

(2) 古高寺田遺跡の調査（平成 22 年 11 月 8～12 日）

古高町字寺田地先で、宅地造成に伴い、約 66 m²を対象に発掘調査を実施しました。当該地は、遺跡範囲外でしたが、試掘調査の結果、遺物・遺構が確認されたために、新たに遺跡として認知されたものです。調査では、ピットや溝 2 条を検出しました。溝から出土した遺物はわずかでしたが、SD-1 は古墳時代、SD-2 は平安時代の遺構と考えられます。新たに遺跡範囲が広がったことで、今後周辺地域の歴史背景についての知見が深まることが期待されます。



古高寺田遺跡 全景 南から

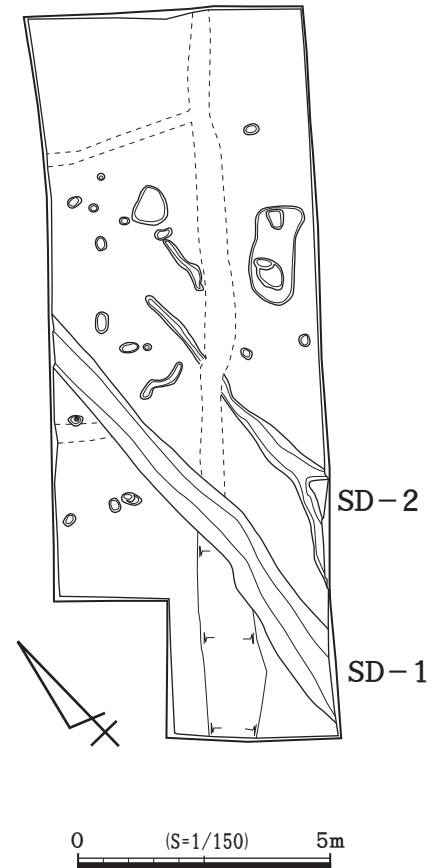


図2 古高寺田遺跡 全体平面図

(3) 益須寺関連遺跡の調査（平成 22 年 11 月 24～26 日）

吉身五丁目字島田地先で、分譲住宅建築に伴い、約 60 m²を対象に発掘調査を実施しました。調査地隣接地点では、平成 2 年度（18 次調査）、20 年度（34 次調査）などにも調査を実施しており、広い範囲の中で遺跡の性格を想定することが可能となっています。今回の調査では、溝 2 条や多数のピット群を検出し、そのピットには掘立柱建物^{ほったてばしらたてもの}を構成する柱穴が含まれることを確認しています。掘立柱建物 SB-1 は、遺物の出土は非常に少量でしたが、おおよそ奈良時代のものと思われます。隣接地点の調査をみると、SB-1 とほぼ同一主

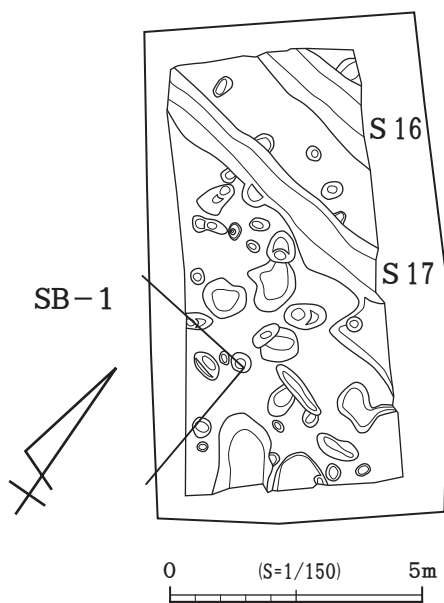
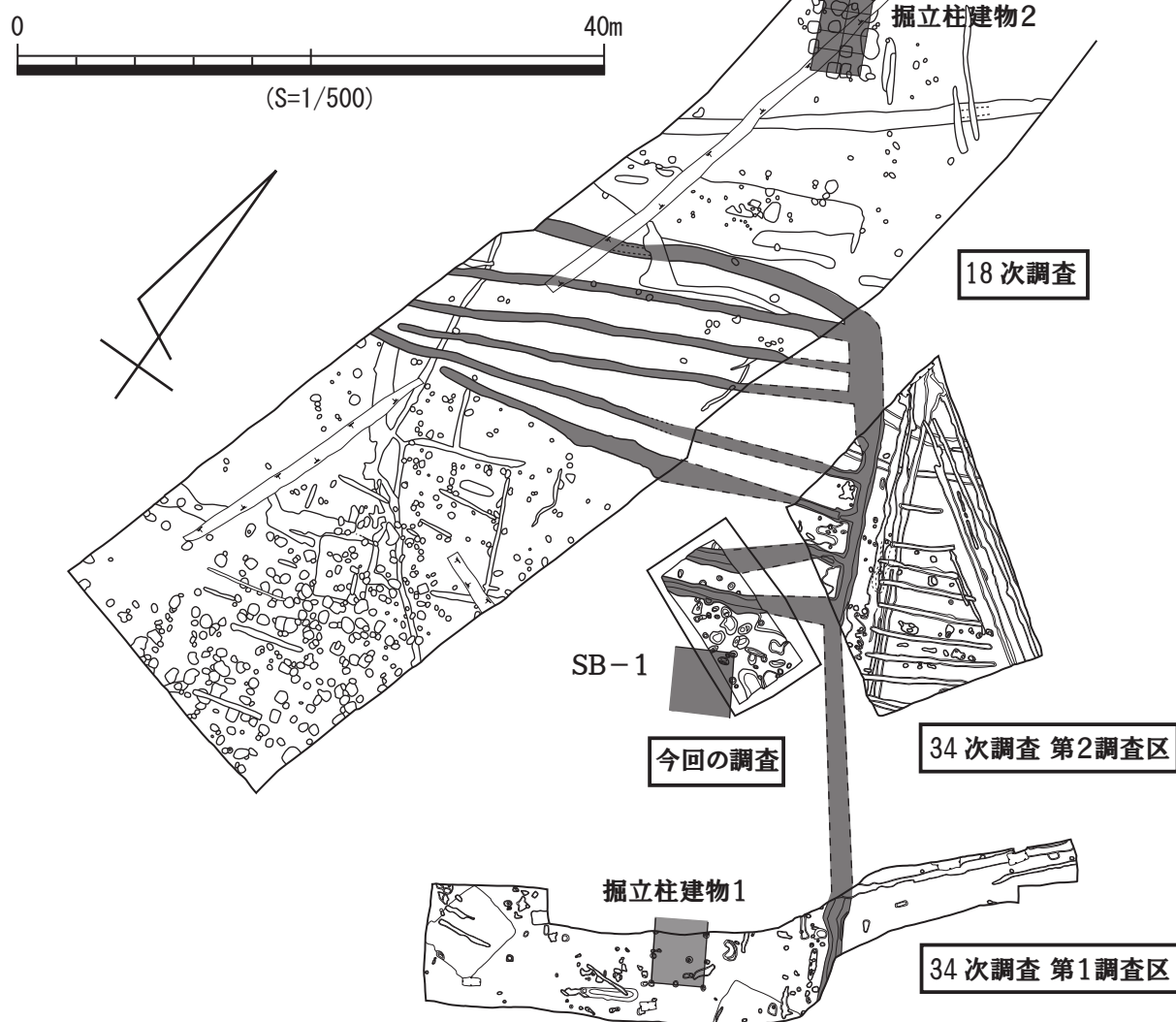


図3 益須寺関連遺跡 全体平面図



益須寺関連遺跡 全景 北から

図4 益須寺関連遺跡 隣接地点遺構図



軸をもつ建物が、34次調査地点および18次調査地点で計2棟確認されています。それらの建物が8世紀前半代のものであることから、今回見つかった建物もおそらく同時期のものと考えられます。また溝S 16・17も、遺物の出土が非常に少量で、遺物から時期の判断をするのは困難でした。ただし、34次調査第2調査区で検出した溝の延長であり、その溝は8世紀前葉に開削され、10世紀中葉までに埋没したと報告されていることから、今回検出した溝も同様の見解が考えられるでしょう。今回の調査で検出した遺構は、主に奈良時代から平安時代のものでした。その時期における調査地周辺の様子を過去の事例と合わせてみると、まず1条の大溝から複数の支流が派生し、ほぼ同一方向へ延伸していることがわかります。そしてその溝とほぼ同一主軸をもって建物が建てられています。益須寺関連遺跡内では、西側へいくほどこの時期の遺構密度は濃くなっていき、遺跡内を縦断する道路、“県道守山栗東線”の西側では10数棟の掘立柱建物跡が確認されています（図6）。つまり、周辺地域に展開した集落の中心は今回の調査対象地よりも、さらに西側にあったと考えられるのです。そして、中心から離れた今回の調査地周辺は、居住地域ではなく、畑地などの利用が想定でき、一定の指向性をもつ溝群は、それに伴う用排水の役割を果たしたと考えられます。

(4) 播磨田東遺跡の調査（平成 22 年 11 月 29 日～ 12 月 28 日）

播磨田町字堂前地先で、集合住宅建築に伴い、約 350 m²を対象に発掘調査を実施しました。周辺では多くの調査履歴があり、主に弥生時代や古墳時代の集落跡や、古代の掘立柱建物などが確認されています。

今回の調査では、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺構・遺物を確認しました。平安時代の遺構は、主に掘立柱建物 S B-1・2・3 が該当し、これらは 11 世紀中葉から 12 世紀前葉の建物跡と考えられます。規模は、いずれも 2 間×2 間以上で、主軸はやや東へ傾く方向に配置されています。同じ時期の土坑 S 90 からは、多数の土師皿が出土し、これは地鎮のために土器を地中に埋めた“土器埋納遺構”と考えられます。また、遺構面より上層にある“遺物包含層”からは、多数の瓦が出土しました。平瓦に加えて、“単弁 16 葉蓮華文”のある軒丸瓦も出土しています。当時瓦は、主に寺院や官衙など特殊な建物にのみ



調査地北部 全景 南から



調査地中央部 全景 東から



調査地南部 全景 西から



掘立柱建物 SB-1 南から

ふ
葺かれたもので、かつてこの周辺に寺院や官衙関連の建物があったことがうかがえる貴重な資料となりました。古墳時代の遺構は、溝 S 60 が見つかっています。幅約 3.5 m、深さは約 1 m の規模で、ほぼ南北方向に走っています。出土した土器から、5 世紀後葉から 6 世紀前葉のものと考えられます。溝の底からは、完形の壺や木製の“横槌”が出土しています。横槌は全長 27.5cm で、扁平な面には多数の打痕が観察できます。“藁打ち”、あるいは工具として使用されていたものと考えられます。弥生時代の主な遺構は、溝 S 40 を検出しました。幅約 4 m、深さ約 1 m の規模で、弥生時代中期後葉から後期のものと考えられます。さらに溝の底から、青灰色粘質土を埋土とする土坑 S 114 を検出しています。土坑からは、木製品が出土しており、先が炭化した“杭”や、“梯子”が見つかります。梯子は、主に“高床倉庫”などで昇降する際に

用いるもので、下端部にある突起を地中に埋め込んで使用したと考えられます。倉庫など、梯子を伴う施設が近辺に存在したことを示す重要な成果といえるでしょう。

播磨田東遺跡では、多数の調査履歴があるものの、具体的な全体像については未だ不明な点が多いのが現状です。しかし、古墳時代後期の“金製空玉”^{きんせいうつろたま}など貴重な資料が数多く出土している遺跡でもあります。今後、当遺跡の検討が進んでいくことにより、新しい歴史背景が見出せることに期待したいと思います。

(木下)

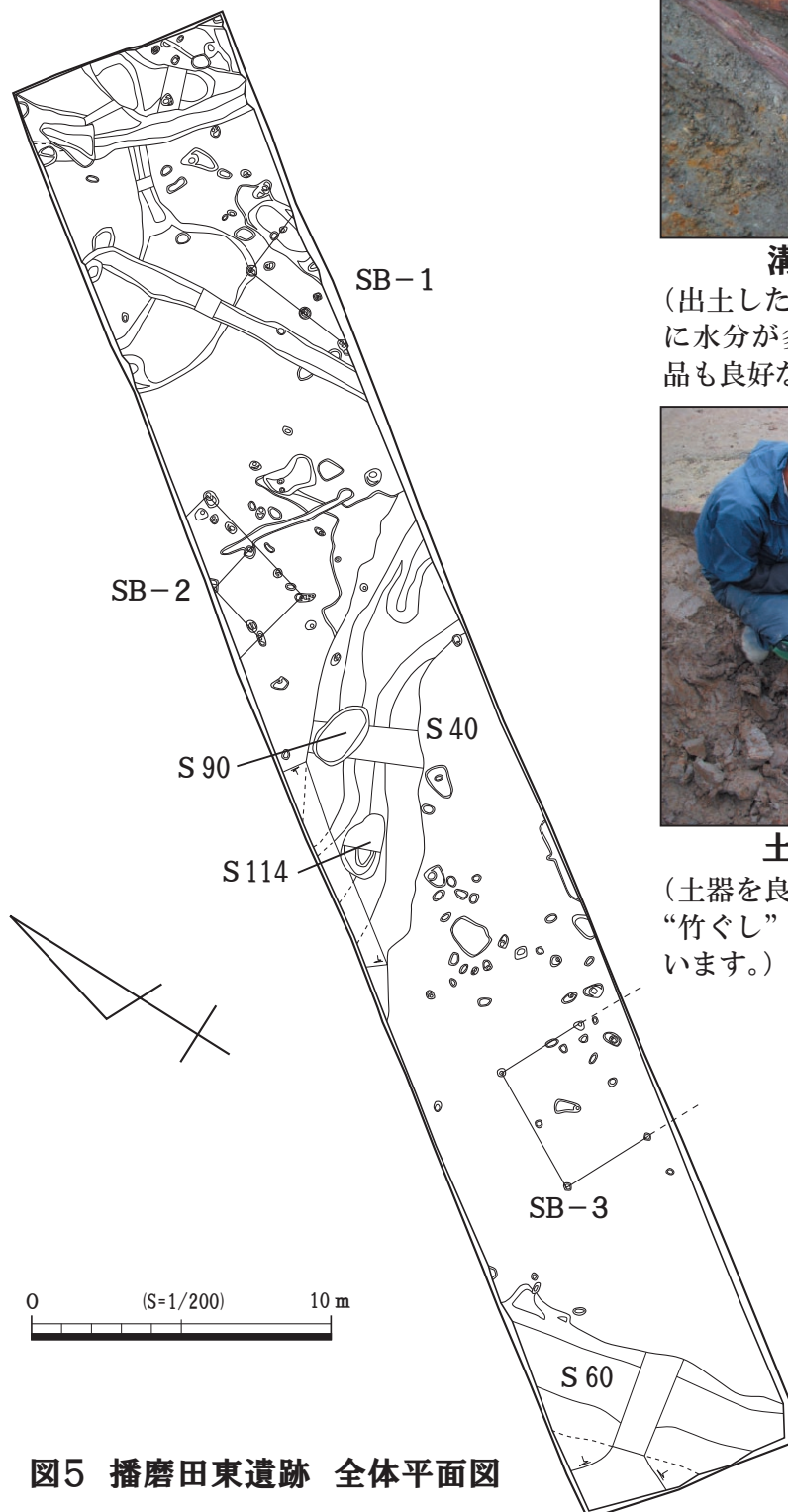


図5 播磨田東遺跡 全体平面図



溝S60 遺物出土状況

(出土した完形品の壺と、木製の横槌。土中に水分が多く含まれていたことから、木製品も良好な状態で出土しました。)



土坑S90 遺物出土状況

(土器を良好な状態に取り上げるため、細い“竹ぐし”などを使って丁寧に土を除去しています。)



出土した梯子

● “環濠あめづくり” が開催！ —下之郷史跡公園— ●

しものごう しせき こうえん

かんこう

あめづくり

昨年(2019年)の11月23日にオープンした下之郷史跡公園で、去る1月8日(土)に「環濠あめづくり」が開催されました。この催しは、下之郷遺跡の活用団体である「稲と雑穀の会」と協働で開催したものです。実験栽培で収穫した赤米の米粉と水アメをこねて、砂糖とショウガ、ゴマで味付けをします。そしてこれを、下之郷遺跡を巡っていた環濠に見立てて、ドーナツ状に形を整えて出来上がりです。参加者は、粘土遊びのように楽しみながら環濠あめをつくり、そして仕上がりを楽しんでいました。

環濠保存施設では、下之郷遺跡を知っていただくための展示に加えて、楽しみながら弥生人の暮らしを体験していただく様々な催しを今後も企画していきます。



環濠あめづくりの様子と、
出来上がった環濠あめ



下之郷史跡公園
開館時間：午前9時から午後5時まで
入館料：無料
TEL：077-514-2511

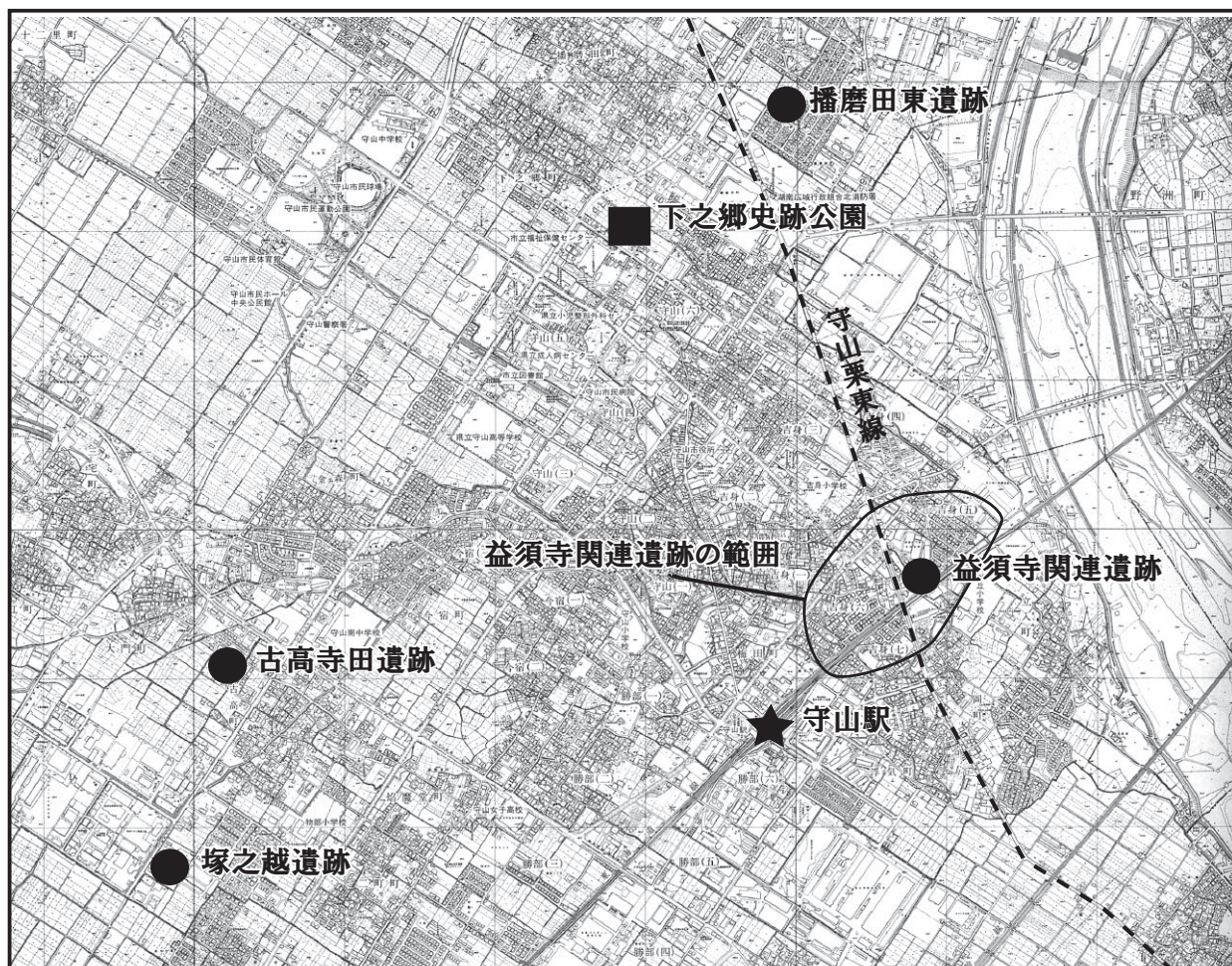


図6 今号掲載の遺跡、および施設位置図

機関紙『乙貞』は、守山市のホームページ (<http://www.city.moriyama.lg.jp>) から閲覧できます。